

于闐 (ホータン) 語服飾考

須 永 梅 尾

References to Apparel and Ornaments in Khotanese Texts

by

Umeo Sunaga

I

10世紀以前における西域南道とイラン・インド・中国諸文化との密接な関係、殊に仏教美術をテーマとした研究は多くの先人によって行なわれてきた⁽¹⁾。この南道の中心として栄えたホータン、Khotan, 古くは中国名于闐、現在は和闐、和田 (Hot'ien), ホータン語では Gostana-désa とよばれる地域は、イスラム教徒によって荒らされるまで、すなわちトルコ化、イスラム化されるまでは王国として、北道のクチャ、Kucha, 古くは龜茲、庫車とよばれた王国と並んで、オアシス国家の双璧といわれた。この王国は後漢から唐代まではほぼ一貫して慰遲 (visa) 氏が統治して全盛期を展開していた。

ここは今日、かの「禺氏の玉」, 「崑崙の玉」の名で有名な軟玉 (白玉, 黒玉) の産出地として知られるとともに、絹織物や綿布の大生産地⁽²⁾でもあるが、絹の製造が始まるまでは毛織物が主であったし、また法顕、宋雲、恵生、玄奘ら、この地を訪ねた入竺求法僧達の記録によって、大乘仏教の中心地であったことが知られる。

地理的位置からしてもインド北西部や西方イランと関係をもつのは当然で、ガンダーラの仏教美術文化の影響を多くうけていた。特に古都ヨートカンの東北にある仏教遺跡ダンダーン・ウイリク (Dandān-uilik) をはじめホータン周辺のラワク、カダリーク、バラワステなどから、かつての華やかなホータン美術の面影を見たのは、かのA・スタイン卿であった。

このスタイン卿がダンダーン・ウイリク (象牙の家の意) の数多の寺院址から発見した出土品のうち、2枚の有名な板絵として知られているいわゆる「ルスタム菩薩像」(整理番号DⅦ-6, 以下図1と略称)と、「蚕種西漸説話図」(整理番号DⅩ-4, 以下図2と略称)とよばれているものをここで取り挙げてみることにしたい。両者とも現在大英博物館所蔵のものであることはいうまでもない。

板絵の大部分にはインド密教的多面多臂像を描いたものが多くみうけられる。この様式の特徴に関しては仏教美術における図像学的見地から優れた考察を加えた研究が多く出されている。板絵についてはA・スタイン卿がその著書のなかで推定しているように、寺院や僧房の壁の部分に取り付けられたり、台に付けて立てられていたらしく、祈願の目的で奉献されたわが国の絵馬の如きものであったと考えられる。あるいは頭光を負っている点から崇拜の対象として描かれたものかもしれない。

スタイン卿は同所から出土した漢籍文書(781~790)や、これを裏付ける中国の開元通宝(713~742)、乾元通宝(758~760)など貨幣が発見されているところから、同地が最終的に放棄され、

荒廃した年代は8世紀の末葉と推定している。従って前記の2枚の板絵も、大体6・7世紀から8世紀頃までに描かれたものと推定して差し支えないと思う。

そこでまずこの2枚の板絵(図1, 図2)について説明しておこう。⁽⁵⁾ 図1(実物のサイズ32.4×20.3cm)は表面(裏面とする見方もある)に描かれたイラン風の装いをした彩色菩薩像(これを神像とよぶ見方もある)である。この板の裏面には三面四臂の「魔王」が描かれているのであるが、これについては割愛しておきたい。この菩薩像は四弁の花文のある敷物またはクッションに両足を交叉させて胡坐し、淡緑がかった黄色の頭光を負い、顔は斜め右方を向き、頭にティアラ風宝冠を戴き、髪は黒く背に垂れ、黒い眉、口髭、スキタイ風あご髯を蓄えている。天衣(領巾)を思わせる細長布が宝冠から背に、腕に絡まりつつ垂れている。体形にフィットした緑色地に花文のある垂れ領^{くび}で長袖の付いた左前合わせ風長上衣と淡茶色地に花文をあしらった袴(ズボン)をはき、膝下まである黒色の長靴を履いている。このような服装と腰帯から真前に下げたアキナケス形短剣などからイラン系貴人の風貌が窺える。四臂すなわち右第一手を膝におき、右第二手は鍵矛あるいは花枝をもち、左第一手には盃を、左第二手が短槍穂先をもつ図像はインド的密教的スタイルの影響と思われる。

スタイン卿はこの貴人像をイランのフィルダウシーの大叙事詩「王書」(Shāh-Nāmah)で活躍する民族的英雄ルスラム(Rustam)であろうと推定した。彼が第三次中央アジア探検の折、アフガニスタンのシースタン地方を踏査し、コー・イ・フワージャ山上のガガ・シャル城址の壁画に、ルスラムに降伏した魔王を描いた図を見て、この板絵の人物がその英雄ルスラムと同一人物であることが分ったという。⁽⁶⁾

つぎに、図2の板絵に見られる絵は普通「蚕種西漸説話」(サイズ45.7×11.7cm)を描いたものとして有名な彩色画である。変色と表面にかなりの剝落が見られる。この板絵は図1とやや異って、同じダンダーン・ウイリクの泥土で造られた寺院では、内側を板で補強する必要があり、それに当てがわれた横羽目板に描かれたものである。

この説話は玄奘の「大唐西域記」に記されたこの地方の民俗伝承で、禁制の蚕種と桑の実とを中国の王女が髪の中に秘かに隠してホータン王に嫁ぎ、この国に養蚕を伝えたという話で、王女が初めて桑を植えた場所には記念として寺院を建立したと伝えられる。向って左端に見える侍女(采女か)の手が、この隠された蚕種を指している。中央には美しい王女が、宝冠または花冠を被り、黒髪を肩あたりまで垂らし、左前合



図1
ルスラム菩薩像(大英博物館蔵)



図2 蚕種西漸説話図の一部(大英博物館蔵)

せ半袖上衣を着て、斜め右下方の繭を盛った籠に手をやって眺めている。また向って右端の侍女は帽子を被り、花文の布をひろげ、右手には三角形の櫛目の道具^(おき)をもつが、これは絹のつづれ錦を織るための織具である。この侍女の前に見えるものは織機^(おりばた)で、こうした織法でつづれ錦がこの絵の描かれた8世紀かまたは7世紀以前に、この地域で織られていたであろうと推定することができる。

王女の後方には王(養蚕の守護神とする見方もある⁽⁸⁾)と思われる一面四臂の人物が描かれている。この絵だけに限らず他にも見られる四臂の表現は、王者の権威を象徴するものとして描かれたと思われる。この王(または神)の像は敷物かクッションに胡坐し頭に光背を負う。王女も侍女もともに頭部に光背を負っているのは、養蚕の守護者として神格化された現われでもあろうか。王はティアラ風の宝冠を載き、長髪を肩から背あたりまで垂らし、イラン風の長い上衣にズボンをはき膝までの長靴を履く。また描かれた四臂では、右第一手に盃、同第二手に短槍穂先をもち、左第一手は膝に、同第二手の持物は剝落して識別しかねるが、何か二又の小さなものである。王の着衣は王女、侍女のそれと違い、前合わせではなく円領^(まるえり)の貫頭衣風に見えるが、北道のクチャ付近にあるキジル画家洞の画家像(5~7世紀と推定)の着衣が円領であって左前合わせのカフタン型であるところから見て、これもそれと同系と見て差し支えないと思う。

板絵全体の着彩は白い下塗りの上に、朱線で肉体を、頭髮や衣服等は墨で描き、赤、青、黄、緑など淡彩で彩られている。

そこでこの板絵に描かれた絵の服装関係の部分を一例として取り挙げ、当時のこの地方で使用されていた服装用語を考察するのが本稿の主題であるが、この絵の服類は孰れも上述の通り6~8世紀頃までのこの地方の服装を概ね反映していると見てよいと思う。実はもっとこれ以外の板絵、壁画、ストゥッコ像、テラコッタ像等の出土品をも取り挙げたかったのであるが、紙幅の都合で上述の2板絵にとどめることにした。

従来これらの衣服名は中国歴代の正史西域伝などや中国仏教僧の記録などに記された漢字、その他英、露、仏、独、日の各国語の名で紹介されてきたが、この地方の言語、すなわちホータン語ではなかった。ホータン語でこれら衣服を何とよんでいたのであろうか。その点をまず考えて見たいと思うのであるが、それと同時にもう一つの動機がある。

それは西洋の服装で今日、胴着とかチョッキを意味するヴェスト(Vest)という語が、古代ラテン語、古代ギリシア語に源をもつことは分っていたが、それが東方のペルシアのアヴェスター語(Av. と略称)の *vāstā-*、中世ペルシア語(パフラヴィ語, Zor. Pahl. と略称)の *wastar* (ag)、インドのプラークリット語(Pkt と略称)の *vastra-*、パーリ語(Pali と略称)の *va-ttha*、仏教サンスクリット語(BS と略称)の *vastrāṇi*, *vāsa-* にまで遠く連なること、さらにホータン語である *vāsta* とも関わる⁽⁹⁾ことが H. W. Bailey 氏の論考で明らかにされた。この *vāsta-* には2シラブルの前で長く伸ばす *-ā-* を伴うイラン語系言語の特徴を見ることができる。またホータン語の *kāṣāya-vastra-* (褐色衣または袈裟)についていえば、語頭にある *str-* には例えば *stramj-*, *striha-* というように真直ぐに引張る、堅くするという意味があるとともに、動詞前接の後にある場合、例えば *pastris-*, *patriya-* という時にも、真直ぐに、堅く、引張るという意味があることを知って、アラム語やパフラヴィ語での衣服を示す語 *rasta* と語義を同じくすることが分り、密かに喜んだ想い出があるので、尙一層、ホータン語についてのこの問題に関心を抱いた訳である。

II

南道のホータンを含めて南北両道のこの地域は、東トルキスタンとも、今日行政区画上では新疆ウイグル自治区とよばれるように、基本人口はトルコ系（ウイグル人）であるが、このトルコ人種がこの地域に住み着き始めたのはそう古くはなく、9世紀以後のことで、それまでは大部分インド・ヨーロッパ系人種またはイラン系人種（ペルシアのインドヨーロッパ人種）の住地であった。ホータン語はこれらの人々の言語、すなわち中期イラン諸言語のうち、ソグド語と並んで存在したサカ語の一方言といわれている。この言語の表記はカロシュティー文字とともにインド古代文字の一つと称されるブラーフミー（Brāhmī）文字の一種で書かれ、主に仏教經典類、説話のサンスクリット（Skt と略称）文からの翻訳、契約文書類等に用いられていた。この言語には多くの Skt, その俗語 Pkt からの借用語（外来語）を含むなど、インドからの影響が顕著であるところから見て、かなり古い時期にイラン語から分離し、インド諸言語の影響をうけて独自に発達したもので、古くインドに侵入したサカ族の言語の一方言であろうとする意見が有力である。¹⁰⁾ このホータン語が行なわれていたのは恐らく4世紀から、または7世紀から10世紀位までの間であったのではないかと推定されるので、¹¹⁾ 中国語（漢代～唐代）やチベット語、ウイグル語等の影響はあったとしても、後のことでしかも影響は僅かであるといえよう。

そこでこのホータン語の服飾考を次の資料をもとに幾つか試みてみたい。

H. W. Bailey, *Khotanese Texts I—VI*, Cambridge University Press, 1945—1967
〔I—III, 2nd ed., 1969〕以下KTと略称。

———, *Khotanese Buddhist Texts*, London, 1951, 以下KBTと略称。

———, *Saka Documents, Text Volume*, London, 1968

———, *Dictionary of Khotan Saka*, Cambridge, 1979, XVIII+p. 559

S. Konow, *Primer of Khotanese Saka*, Oslo, 1949.

———, *Saka Studies*, Oslo, 1932.

R. E Emmerick, *Saka Grammatical Studies*, London Oriental Series, vol. 20, Oxford, 1968

ホータン語の中で、衣服を意味する語はかなりの数にのぼるが、語義に至っては甚だ複雑で、（A）着装動作を表わす動詞からきた語、（B）衣服の素材そのものを示す語、（C）衣服の機能、状態を表現するもの、と便宜的に3つに分けて考えてみることにして、順次、列挙していこう。（*印 外来語を示す）

(A)

。「覆う」という動作を表わす語から生まれた衣服名 *urānāṃ*, *ttuue*, *pāḍaka*, *phaurthaka*, *byiḥa*, *maṇḍūla*-, *haḍa*, *karastā*

。「包む」の意から派生した語 *pāsta*, *pvaica*

(B)

。衣類の総称的なよび名（いわゆる被服として） *khai*, *khoca*, *cauškā*, *ttiraha*, *pamūha* *prahone*

。布衣を意味する名 *cile*, *raha*-, *vānā*

。布地の切れを表わす語 *khausya*, *balohā*, *śaci*

。動物の毛皮を衣料とする語 *khoca* *khausā*, *kanga* (羊皮), *birga* *kagyä*(狼皮), *hāysä*,

thūḍapa* (貂の皮), yaragaka* (山羊皮), 不思議に鹿皮に当る語が見当らない。

- 「編む」の意から派生した語 auvya
- 「剝ぐ」の意から出た語 pāsta
- 絹(繒)で作られた衣料として thaura-, thau, thaunaka-
- 錦織を示す語 svarṇa-sūttāra*
- 「棒で敲く」の意から艶のある布衣を表わす語 thauracaiha-*
- 氍毹(絨氍, 絨毹)として prrastharmaḍa- 「大唐西域記」卷十二, (大正新修大蔵経, 第五十一卷所収) 瞿薩旦那国の条にある毼毹, 細毼^{さいせん}, また, 宋の葉隆礼の「契丹国志」卷二十一, 諸小国貢進物件中にある細毛織成類に相当するのではあるまいか。
- 植物繊維から成る衣料を表わす語 hvāṣṣa-, vāsta
- 材料そのものの名称として
 - 「大麻」……kāṃpha
 - 「亜麻」……kumbā
 - 「綿」「木綿」……kapāysa-
 - 「羊毛」……pema-
 - 「毛布」……kabala*
 - 「フェルト」……namata 前述の細氍, 氍毹に同じか。
 - 「綿布」……būṣinai

(C)

- 衣服, 殊に婦人用外出着の布切れを示す語 kaimeja
- 褲, 袴(ズボン)を表わす語 kaumadai, sūthamna*
- 外套^{きんとう} khapa
- 袖 chāṃsyū*
- 雨合羽(レインコート) yaḍama*
- 衫(シャツ) kuratu* (別に単を表わすこともある)

(その他)

衣服ではないが服飾に必要とする付属品として,

- 帯(ベルト) rrānā, ūrabada, attaravāysā*
- 肩衣または領巾 hurā (帯を兼ねることもありうる)
- 被り物(帽子または髪飾り) murkhutā*, maula*
- 冠(頭巾) ttāva この語と被り物の2語は「宋雲行紀」于闐の条にある金冠, 鷄幘, また「梁書」卷五十四, 西域伝の「于闐の王金幘を冠ること, 今の胡公帽の如し」とあるものに相当すると考えられる。幘は髪を包み髪型を整える巾のことである。
- 頸飾としては hāra, cāte
- 手巾 lahāpī*, śukyaina* (中国語の手巾の音訳)
- ナブキン gūkyaina*, hūḍaiga* (手甲)
- 武器としての衣服を示す語 鎧…āysira-, 胴当…baṃggāma-, 鎧甲…baṭha-, などがある。因みに刀剣(大小を問わず)…kāḍara-, 長靴…khauṣa

Ⅲ

さて、課題である先きの板絵に描かれた服飾に最も適切な語を、前章で列挙した語彙の中から選び出してみよう。

はじめに図1から考えてみると、このルスタム菩薩の着ているもの、すなわち長上衣としては中央アジアをはじめかなり広く分布していたいわゆる四大衣服語として知られる *vāsta*, *haḍa*, *pamūha*, *khapa* のうち、*khapa*(マント)を除き、前三者がその衣服として適当であろうと考え、*vāsta* は既に触れてきたので、*haḍa*, *pamūha* を分析してみることにする。

- ・ *haḍa*……KT2.41(Ⅱ巻41頁の略記)に *ttye hinā-pamūhai haḍā baštā sve bidā baridā* (このために衣服は赤いローブ・スーツから成り、それを肩から着る)とあるが、*haḍa* はホータン語に屢々みられる頭母音に始まる、例えば *arta* の前に *h* を加えたものか、あるいは語幹の *har-* から *harta-* へ、または *fra-rta* が *harta* へと変化したのか、そのどちらかと考えられる。これらは何れもグルジア語の *ardag-i* と関係ありとされ、この語にはギリシア語の *σινδών* が当てられる。これはグルジア語の新約聖書とギリシア語のそれとの対比、例えばマルコによる福音書 14.51 にある *emosa ardagi*……*περιβεβλημένος σινδώνα* (素肌に亜麻布を纏いて)、同じくルカによる福音書 23.53 *c'argragna ardagsa*……*ἐνετύλιξεν αὐτὸ σινδόνι* (亜麻布にて包み…)とあるのによっても証される。*σινδών* は衣、亜麻布を意味する。*ardagi* の *-rd-* は古イラン語の *-rt-*、*-rd-* と同じである。またアルメニア語の *arta-* もグルジア語と同様である。語根 *ara-* は Av. 語では密着する、覆う、体に合わせて着るの意があり、古インド語の *ara-*, *ala-*、ギリシア語の *ἀραρισκω* とラテン語の *artem*, *ars* の *ar* と関連するものに相違ない。以上の推定から *haḍa* とよぶ衣服は、東の中国、梁書伝四十八に出る長身小袖袍(渴盤陁国の条)、小袖衣、開頸縫前の衫(末国の条)に略々近く、西はギリシア、ラテン、アルメニア、グルジア、イラン、インドに広く分布した大きい長上衣と考えてよいであろう。

- ・ *Pamūha*……KT 2.117 (古ホータン語P資料 2898.6)、KT 3.106 等に出てくる。KB T72 には *hinā-pamūhai haḍā* とある。この語の動詞は *paṃjs-*, *paṃāta-* で…の上に置く、つまり着る、覆うの意である。KT 3.105 には *pamya* とあり、KT 3.106 では *šairka-vamye* (よく着た)とある。古ホータン語E資料 25.406 の *paṃjsau* は服装を意味する。Zor Pahl の *patmoxtan*, *patmočet*, *patmōčan* パルティア語の *pdmwg*, *pdmwcn*, *pdbarg*, *barg* にも通じる語である。

これらの語は何れも長上衣、外衣を意味しており、*vāsta* なる衣服と並んで、ラスタム菩薩像の長上衣に相応しいと考えられる。図2の国王の上衣もこれらの語でよんでよいと思う。ただこの王の衣服が貫頭衣であるとするならば、それらしい語が一つあるのに気付く。*pāḍaka* がそれではないかと思うのであるが確言いたしかねる。P資料 4099 (Manj 3) …… *khū punausra paḍaka vāsta* (ひとは長上衣のなかにそれ「頭」を差し込む)とある言葉が気になる。ここでは *vāsta* は *padaka* と同義であるが、*padaka* は覆うものを意味する。*-āḍa-* は Zor Pahl の *partaka* のように、*-arta-* から *-ysāḍa-* へ、そして *-āḍa-* と変化したものであろう。*vāsta* は植物の繊維を意味する *hvāṣṣa-* から出ているとも考えられるが、もしこの考えが正しいとすると、次の如くに分解されよう。すなわち *hu-vaxša* で、オセッ語の *xuāsā*, *xos* と同系であるから材料(植物)に即した語である。この2つの語を重ねたのは *dyadic* で、*vāsta* は衣服そのものを、*paḍaka* は貫頭衣を示すためのものではなかったのだろうかとも考えられるが、

如何なものか。

図2の女性の衣服もこれらの語で表わして、基本的には間違いではないが、もしもこの女性服が短上衣を着ているとすれば、その短上衣を示す語と考えられるのは *kuratu* である。この語には Bagchi の Skt-Chin Lexicon⁶⁴⁾ によると、中国語の衫 *šan* (シャツ, 単衣) を当てており、ホータン語にはもともと見出されない語である。前合わせ型ジャケットを意味する西方のイラン語、ソグド語の *qwrty*, オセッ語 *kurät*, 近世ペルシア語の *kurtah*, *kurti*, グルジア語の *k'urt'ak'-i* などから入ったものであろう。同じく女性の服で、その短上衣の下方に、もし裳をつけているとする(実際に下方が描かれていないので何ともいえないのであるが)ならば、それは *prahōne* という裳であろう。この語は他に *prahauṇa-*, *prahauna-* と *vrrahaunī*, *vrraha* と書かれる。例えば KT2.76 の *hamāña-vrrahaunī pimminai thau* (夏衣の毛織の布) とか, KT 3.47 *śiya-vrrahā satta* (白衣を着た人) とあるように、かなり表記に変化がある。Bagchi の前記辞典 (Skt-Chin Lexicon II 435, 525) では *parhūṇa*, *parhyaṇa* を中国語の裳 *şang* の字を当てている。裳を着ける、の動詞は *prahauy-*, *prohauy-* である。

これらの概ね外衣を表わす語の他に、內衣、下着を意味する語の一つあげておきたい。 *attaravāysā* といって3枚重ねのうち最も下に着る衣服を指している。

袖についてであるが、図1のそれは長袖であり、図2では王、王女、侍女は共に半袖で、腕の部分は手甲の如き布で蔽われている。KT 2.75 に *kāmbaṃdā haurā hauḍe še u chāṃsyū šau* (彼は *kāmbaṃdā-* と *chāṃsyū* からなる贈物をした) という文があるが、この *chāṃsyū* は中国語の長袖 *ţsan-siu* (*d'iang-zīu*) の音訳である。手甲はむしろ KT 3.102 にある *śukyaina* (中国語、手巾の音訳か) よりも、同じく KT 3.102 にある *hūdaiga* の方が相応しいと思う。というのは古ホータンP資料 2892. 166, KT 3.81 にある「覆う」の意をもつ *hūlaihä* 同じ系統の語であるからである。両者の関連を示す語として KT 2.72 の *hūlyega* がその変移過程を暗示していると考えられる。手巾には覆うの意はなく、従って *śukyaina* には手甲の意は存しない。因みに手巾、手拭いを表わす他の語に、*mvakalai* (KT2.116) があることを紹介しておきたい。

さて褲(ズボン)であるが、KT 2.124 の *thauna saci jsa kaumade hajsādā* (布切れからズボンを作った) にある *kaumadai* (e) が先ず挙げられる。この語はクロライナ(楼蘭、鄯善地方)を中心に使用されたカロシュティー文書にある語 *kamamte*⁶⁵⁾ に対応する。

次に Bagchi の Skt-Chin Lex.⁶⁶⁾ によると、中国語の袴 *k'u* に当たる語として *Sūthamṇa*, *tsanthaya* があげられている。この語はヒンディ語の *sūthan*, *suthnā*, *suthnī*, ヌーリスターニー語の *şatū*, ワイガリ語の *sota* と同系である。クロライナ語では *şomstaṃni*, チベット語では *dor-ma* である。

帯には *ūrabada*, *hurā* がある。このうち *hurā* はスカーフを兼ねられるという便利なものである。古ホータン語E資料 23.168 に、*hurā stura pūheitā myāni samu kho ysarnnai nikā vūdā* (丈夫で厚いスカーフをウエストで締め、黄金製の *niška*⁶⁷⁾ のように差し込む) とある文はその一例を示している。A. Getty 氏はその著「北方仏教の神々」の中で、*hurā* を締め、または巻きつけている姿はマイトレーヤ(弥勒)像における特徴的スタイルであると述べているが、確かにその通りで、*śikṣāsamuccaya* (大乘集菩薩学論) 276.3 に BS で *parikara-bandha-s* (綬帯を緊めること) とあるのもそのことであろうと思う。*hurā* の語源についてはいろいろ考えられるが、「股」を意味する BS の *ūru-* か、チベット語の *brla* から出ていると考えてよいで

あろう。普通の帯は ūrabada で、「胴のような膨らみ」を意味する ūra から派生したと見るべきで Av の udara-, banda- と関連がある。序でだが、腰に佩く太刀は kāḍara- という。

王が胡坐する敷物、マットを示す語には, prrastharmada- が挙げられる。KT 3.51 : 68-69 piḍā bvākadā prrastharmaḍā beysūñū prrabaibaikāyā beysā hālai (絵に, 記録に, カーペットに, 仏陀像の中の仏陀に尊敬を……), KT3.51 : 74 prrastharmaḍām diyagarām u araṇādisau hālai (カーペットに, 灯明に, 草庵に……) などの各文に出てくるこの語はソグド語の prštrn, pr'yštrn と共通する。prštrn は pati-star- が語根で, バルーチー語の pastark(鞍), アルメニア語の pastar, ギリシア語の στρόμνη に相当する。直接には prrasthar- はイラン語の parā-star- か, 或いはむしろ Pkt. prastaraṇa- のどちらかから出ている外来語であろう。この敷物には厚物, 薄物の各種があるのはいうまでもない。

被りものについて一言すると, 冠には pesārā があるが, 中国語でいわれる金塗銀でできた場合 phrramaina pesārā とよぶことができる。或いは後述する予定の maula に黄金を意味する ysarrno の形容詞で補い maulu ysarrno と作ることができる (E資料 6.31)。

帽子または髪飾りに当るものに murkhuṭā, maula がある。前者は KT5.155 <tti> Jsām murkhuṭā pyanye kamali buškve (彼は……と murkhuṭā- の被りもので頭を覆った) に, 後者は KT 2.104 jñāninai maula pechvāme (知識の髪飾りのついた被りもの) に出てくる。これは孰れも前にも触れたように髪を包んで髪形を整える中国語の幘に当ると考えられる。

花冠は grauna とよび, 図2の王女の頭上に載っているものは, 多分これであろうと思う。この絵の花冠は金糸で織った錦, すなわち svarṇa-sūttāra に 花をあしらったものであろうか。この svarṇa-sūttāra は仏典「金光明経」(Suvarṇaprabhāsottama-sūtra)⁹⁹の略称 svarṇa-sūtra, sauvarṇa-sūtrāṇi からその意味をとって転用した良き例の一つで, Skt の外来語であることは勿論である。(E資料 211.1, 247.1 による)

頭巾に相当する語には ttāva (KT 2.104, P資料 2787.76 narvakalpa-jñāninai ttāva) が知られている。この語はペルシア語(アラビア語化した)の tāj, シリア語 t'g-', tg-', アルメニア語 t'ag と祖型を同じくすると見てよい。

頸飾りとしては, hāra, cāte がある。後者の cāte は kyite (E資料 14.137) とも書かれてあり, アルメニア語の čitak (頸飾り) と関係があるのではないかといわれる。

^{はたお}機織りにかける糸については, 前述の suvarṇa-sūttrū (錦織糸) も糸のうちだが, 一般的には dasa が使われる。dasa には絹とか綿とか素材そのものの意味はない。KT 3.12 śśiya kapāysimja dasa bañāña (白い綿の糸は……を縫うためにある) とか, E資料 21.39 kho^うju ye daso jsindi samu (人が糸を[光沢を出すため]擣つ時のように……) とあるように, 単純に糸を表わす語と考えられるが, BS の語で錦糸(金糸)を示す ysarattaśām なる語がある。ここでは dasa の -d- が -tt- に変っている。ペルシア語の dasah, バルーチー語の dasag, Pali 語 dasā-, dasa-ṃ と関係あるのは勿論である。また「大唐西域記」巻十二, 瞿薩旦那国の条にある「……糸を紡ぎ^{しちゆう}絶紬(つむぎ織)に巧みである。」⁹⁹の記述にある紡いで, 織った絶(あしぎぬ), 紬(つむぎ)の糸(絹糸)は dasa に相違ない。

序でに絹(繒)のことにも触れておきたい。先に絹で作られた衣料として thauna- という語を記したが, KT 5.113, KT 2.63 には絹を表わす語として出てくる。後に thau となるが, ウイグル語の ton (衣服)はこの thau を承けている。オセッ語の Digoron 方言では tunä,

Iron 方言では *tyn* とよばれるが、何れも Skt の *thavaṇa* と共に *thau* と連がりがあるものと推定できる。

さてホータン語における四大衣服語のうちで、まだ触れていない *khapa* (マント) と仏教僧侶と深い関係のある衣服、*kāṣāya-vastra* (赤褐色衣、染衣、糞掃衣、間色衣、袈裟などと訳される) について言及しておきたい。図 1, 2 の絵には、この両者の衣服は描かれていないが、事実ホータンは仏教の中心地であったし、同じくダンダーン・ウィリクの第 2 寺院址壁画にある「竜女伝説図」やその他、同地域付近の他寺院址(カダリーク、ラワク等)の出土の壁画、ストッコ像などから知られるように、袈裟はこの地域の重要な衣服であったと考えられるので挙げておかななくてはならない。

khapa は例えば KT 5.214 に *thauna khapa* (絹製のマント) とあるが、KT の中には他の *haḍa*, *vāsta*, *pamūha* の各語に比べ、ほとんど出てこない。このことは何を暗示しているか、確かなことはいえないが、余りマントは使われなかったのではないかとと思われるが如何であろうか。むしろこの語のもつ興味は、語頭の *kh* が *k* に変っている Zor Pahl の *kapāh*, さらに西方の涯、のちのポルトガル語の *capa* へと連がるのではないかという点である。

kāṣāya-vasṭa の語は E 資料 4.82 に, *gyastūṇa thauna kāṣāya-vastra rrusana* とあるのみで、他の資料の E 23.229 では *rrusto cilo*, E 23.309 には *rrusta-vrahauna* (何れも法衣) と翻訳された語で記されている。クロライナ語では *kaṣara*, トハラ語 A では *kāṣār*, *kāṣāri*, トハラ語 B では *kaṣār*, ソグド語で *kr'z'kh*, ウイグル語 *kz'ry* のち *k'r'z' tw̃n* (*karaza ton*) とよばれる。ではインドではどうかというと、ジャイナ教プラークリット語 (Jaina Pkt) では *ratta-paḍa-*, ジャイナ教サンスクリット語 (Jaina Skt) では *rakta-paṭa-* (何れも赤褐色の法衣, マント) となっているように、この語はインドでは仏教衰滅後、力を失ったが、シルクロードを北伝した仏教とともに、流転しながら極東の地日本で袈裟として息づいている。

最後に衣服材料そのものを表わす語にどんなものがあつたのか。すでに第 II 章で列挙したが、それらのうち綿を表わす *kapāysa-* (KT 2.18, 3.19) は Pali 語の *kappāsa-*, ウイグル語 *kāpāz*, 東トルコ語 *k'bz* と連がりをもつだけで問題とすべき点はないが、ただ *būṣinai* の解釈は少し難かしい。例えば 0 資料 157 では *civarau phaurthaka śau būṣinai* (*civara*, ロープと *phaurthaka* は綿から作られた) とあるようにこの語は綿を指すと考え。この *būṣa-* はギリシア語の *βύσσος*, シリア語 *būṣ-ā* の形から出たウイグル語の *böz* と関係がある。ところが KT 5.375 の *Sitātapatra-dhāraṇi* の一節を記したところに、白氈 ^{はくちよう} *po-tie* と中国語で訳してある。Bailey 氏はこの白氈は山羊の毛をわた状にしたものであろうと考え、*buysa-* を「山羊」, *buysīna* はその形容詞「山羊の」としている。だが P. Pelliot 氏の著書で、マルコポーロ時代のウイグル語 *böz* は綿布であつたとしているし、F.W.K. Müller 氏や B. Laufer 氏らはこの語と同根のモンゴル語 *bus*, *bös*, ツングース満洲語 *boso* を綿布としている。諸橋轍次氏は氈について、杜甫、王維をはじめ中国人は皆この字を毛織物を意味するものと解しているが、実はこの字はすべて白疊布を意味し、白疊布とは棉(木棉、草棉)の実の繊維(綿絲)で製した布であると記している。また、中国に棉が移植されたのは六朝以後であるから、それ以前の中国人が西域の棉実を見て、或いは野蚕の繭、或いは毛の一種と見做したので毛旁の字を用い、これを白氈と記したのであろう。なお白氈は元来棉実の称であつて、棉実の絮が白いので白字を冠したものであると思われると述べておられる。KT 5.375 で *būṣinai* を *vastre* として見て、中国語の白氈という訳字を与えたのは果して適切かどうかは分らないにしても、訳語として白氈を正しい

意味で使ったものと素直に信じるならば, būšīnai は羊毛をわた状にしたものとするよりは, 綿布と理解すべきではあるまいか。ラテン語の byssus にも羊毛の意はない。

IV

以上ダンダーン・ウイリク出土の板絵(図1~2)に描かれた服飾を参考に, ホータン語の服飾に関係ある語を70ばかり取り挙げ検討して来たわけであるが, これでホータン地域の服飾の全容が明らかにされたというわけでは勿論ない。それはまだほんの一部であるに過ぎないばかりでなく, ホータン語そのものの大部分が, 今日, 旧南道沿いに栄えた古ホータン王国の多くの遺跡が流沙の底に埋没してしまったように, 殆んど忘れ去られたままになっている。ホータン語の復元は, 19世紀末, 20世紀の初め以来各国の学者探検家がタリム盆地を中心に行った調査で, もたらされた文書, 資料類の解説の結果はじめられたトハラ語A・B, クロライナ語の研究の歩みと共に遅々として捗らない。今ここでこれらの言語学上の諸問題に言及する余裕はなく, またその能力もないが, これまでの検討を通して少し気付いた点を補足させて頂くことで結びとしたい。

まずホータン語には借用語(外来語)が非常に多いことで, また固有の言語(古ホータン語)と思われる語にすら, 旧いある時期には外来語であったと推定できる語がかなりあることである。例えば haḍa, pamūha の項を見て頂きたい。そういう意味ではこれは, ホータン語だけに限られる問題ではなく, 隣接のクロライナ語, 北道を中心に行なわれたトハラ語A・B各方言とも共通する問題なのであるが, 広い地域, 主にパミール以西のイラン系, 殊にインド系の諸言語が古層の上に多重層的に蔽い被さる形ででき上った言語と比喩的にいうことができる。

次に外来語のうちどうしても忘れることが出来ない言葉として絹(silk)に縁由のある語がある。絹を表わす語としては thaura-, thau, thaunaka- があるのだから問題はない筈であるが, 実はギリシア語で絹を表わす *σηρικόν* (-κός), *serica* の系統にある語が, 今まで見てきた限りKT史料に見当たらないことが気懸りなのである。セリコン(一コス)という名称の語源に関しては種々の学説がある。これらの中で原田淑人博士の所説に耳を傾けるならば, 絹には白色のものと黄色を帯びたものがあり, 漢代においては黄色を帯びた絹布すなわち縞を一名鮮支 *sen-ki*, *sen-gi* とよんでいるのは絹を意味するモンゴル語 *shirghek*, 満洲語 *sarghe*, ペルシア語 *saragh* 等と関係あるもので, この *serica* の語源は中国語ではなく, 外来語であったことが分る。すなわちモンゴル語に語源を求めるとするなら, *shirghek* の名は白鳥庫吉博士の推定せられた通り, 匈奴或いは大月氏を介して西方に伝わったのであろう。またH・シェファー氏がノイン・ウラのシリア製と見られる絹織物について, 恐らくこれは匈奴の単于が中国宮廷を通じて入手したものであろうといい, 更にE・ディール氏らの報告によって既に紀元前3世紀にはボスフォラス王国の商人が匈奴の単于との中国産絹の取引きに, 天山北路近くエビ・ノール(塩湖)辺りまで徘徊していたことが明らかにされた。これらの論考によって考えるなら, セリコン系の語は主として天山北路を紀元前6—5世紀ごろから匈奴をはじめとし, 月氏またはボスフォラス商人たちの手で伝えられたと見るべきで, ホータンは勿論, 南道, 北道もたとい経過したとしてもその痕跡を留めなかったのではあるまいか。これには北路, 北道, 南道に沿って住むオアシス民の言語系統の相違という問題とも, また異民族による支配の交替の問題とも絡んで来るので他日に期すべき問題としたい。

この他にもう一つ触れておきたいのは, ホータン王国が養蚕に力を入れたことは, 「蚕種西漸説話図」や玄奘の「大唐西域記」等で既に知られる通りであるが, 蚕を表わす語が見つからないということはどうしたことか。ない筈はない。もしかすると存在していたが, 今までに発見され

た文書類にはないだけの話かも知れない。或いは看過しているのかも知れないので、少し調べてみると bam 複数 bana (KT5.174) という語があった。従来この語を袋、包みの意に解していたので気に留めてもいなかったが、ブリニウスの「博物誌」巻11, 第25節に蚕 (bombycum), 第26節には繭 (bombylis), 蛾 (bombyx), 絹 (bombycina) など一連の語に出合い、ホータン語の bam はギリシア語の蚕 $\beta\omicron\mu\beta\acute{o}\kappa\omicron\varsigma$ ($\beta\omicron\mu \cdot \beta\acute{o}\kappa\omicron\varsigma$) の $\beta\omicron\mu$ - と何らかの関係があるのではないかと推定するのであるが、牽強付会に過ぎるであろうか。今までこの語を banda- (結ぶ, 締めるの意をもつ動詞) との関連で考えて来たが, bam が $\beta\omicron\mu$ - と関連ありとすれば, 蚕はホータン語にあったことになる。もう一度再考してみる必要がありそうである。

言語の問題はその程度にして、服飾に視点を移そう。中国正史では于闐国の服飾風俗について詳述したものは意外に少ない。梁書伝四十八に「中国と共に等しく尤も仏法を敬う。王の居る所の室、加うるに朱画を以てす。王金幘を冠ること、今の胡公帽の如し。妻と並びて坐り、客に接す。国中の婦人、皆辮髪にて褰袴を衣とす」。五代史, 卷七十四の于闐の条に「(李) 聖天衣冠中国の如し。其殿皆東を向き, 金明殿と曰う。楼有り七鳳楼と曰う。蒲桃を以て酒となす。又紫酒, 青酒あり。其釀する所を知らず, そして味尤も美し。……其の衣は布帛にして……」等とあるが、この五代後晋の時(938年)の于闐王李聖天は敦煌 98 窟の壁画に描かれた五代于闐国王図の当人であって、その服飾はかなり中国風であることが伺われる。これらのことからホータン国の服飾で、宮廷人と民衆のそれとでは、時代によって一様ではないにしても、かなり相違があったものと思われる。以上の梁書, 五代史のおおのの于闐の条に述べられた服飾の他、「法顕伝」一卷, 于闐の条, 「宋雲行紀」中の于闐の条, 何れも宮廷人(男女)の服飾を僅かに記すに過ぎない。後者には「その風俗, 婦人は袴と衫, 束帯をしめ, 馬に乗って疾走すること男子と異ならぬ」とある。「大唐西域記」の瞿薩旦那国(于闐)の条にも服飾について余り触れず、「毼毼, 細毼を産出し, 糸を紡ぎ絶絢に巧みである。また白玉や鬘玉を産する。気候は和順であるが, 旋風がまい土埃を飛ばす。……人々は富裕で, 家々は業に安んじている。国がらとして音楽を尊び, 人は歌舞を好む。毛織物や皮衣を着るもの少なく絶絢(つむぎ)・白鬘(もめん)を身につけるものが多い。容儀には礼節あり, 慣習には紀律がある。文字・法則は印度のあり方に従っているが, 少しく字体・筆勢を改め, やや変化がある。言語は諸国に異っている。篤く仏法を尊んであり, 伽藍は百余ヶ所, 僧徒は五千余人, みな大乘の教えを学習している。……」と記す程度であり, 民衆の服飾を如実に知るには飽き足りないという他はない。宮廷, 殿上人のそれにしても決して充分といい難く, そうした服飾の空白部分を少しずつでも埋めていくためには, 出土した遺物, 壁画, ストッコ像, テラコッタ像等に見られる着衣の表現, 模様等をもっと詳しく調べる必要があるし, ホータン出土文書の詳しい分析, 検討という地味な作業を続けなければならないが, 同時にホータン地域以外の南道, 北道沿いのオアシス都市国家における服飾文化との同時代的比較研究を進めていくべきであろう。本稿で試みた服飾語によるアプローチが, そうした空白部分の解明に今後少しでも役立つことが出来るならば幸いである。

なお本稿で使用したホータン語関係文献の多くは, 財団法人東洋文庫所蔵のものであることを付記し, あわせて謝意を表したいと思う。

(注)

- (1) 熊谷宣夫「中央アジアの仏教美術」, 西域文化研究, 法蔵館, 1962を参照されたい。
- (2) NHK(TV)特集「シルクロード」7. 砂漠の民～ホータン(昭和55年10月6日, 夜8.00放送)によると, ホータンは古来玉の産地として名高く, 古代王国の王城のあったところ。東西貿易の中継地点として栄えた。いまホータン地区では56の人民公社が養蚕を行い, 絹織物は年間500万元を売り上げている。110

- 万人の人口のうち、ウイグル人は95%、イスラム教徒であるという。(ただしホータン県人口18万人、ホータン鎮人口5万人)
- (3) Aurel Stein, *Ancient Khotan*, Oxford, 1907, pp. 277—283
- (4) 池田百合子「西域南道とインドの関係」松田寿男博士古稀記念出版, 東西文化交流史, 雄山閣, 1975, 58—74頁を参照されたい。
- (5) この板絵については、池田百合子, 上掲書の他に、秋山光和「イラン風の装いをした神像」中国美術, 第一巻, 絵画 I, 講談社, 1973に詳しい考察がある。
- (6) A. Stein, *Innermost Asia*, Vol. II, chap. XXVIII, Oxford 1928, pp. 915—917
- (7) 玄奘著, 水谷真成訳「大唐西域記」, 中国古典文学大系22, 平凡社, 1971, 295—304頁
- (8) A. Stein, *Ancient Khotan*, p. 260
- (9) H.W. Bailey, *Vāsta*, in *Iranian Studies* ed. by Asmussen, Copenhagen, 1966, pp. 25—43
- (10) F. Bergman, *Archaeological Researches in Sinkiang, especially Lop-nor Region*, Stockholm, 1939.
- 榎 一雄「中央アジア・オアシス都市国家の性格」岩波講座世界歴史6, 古代6, 1971, 338—339頁
- (11) 護 雅夫「西域史の第一展開」世界の文化, 西域, 平凡社, 1966, 69—72頁
- 榎 一雄, 上掲書, 347頁
- (12) ホータン語以前, 2・3世紀のこの地域の言語はブラークリット語(Pkt)で, インド西北部でガンダーリー語(Gandhāri)といわれるものと同じ言語ではなかったかという専門学者(J. Brough氏)の意見が有力である。それは出土の仏典, 法句経から窺われる。(榎一雄, 上掲書 348頁)
- (13) 北魏, 楊衒之撰, 長沢和俊訳注「宋雲行紀」(洛陽伽藍記, 卷五, 付載)東洋文庫194, 平凡社, 1971, 166頁
- (14) P.C. Bagchi, *Deux Lexiques Sanskrit-Chinois*, Tom.I, Paris, 1929, p. 99
- (15) T. Burrow, *The Language of the Kharoṣṭhī documents from Chinese Turkestan*, Cambridge, 1937, p. 81
- (16) Bagchi, *ibid.* p. 308, 50 a 3
- (17) A. Getty, *the Gods of the Northern Buddhism*, ed. 2, Oxford 1914, 1962, p. 21
- (18) *Suvarṇabhāṣottamasūtra*, Sanskrit text, ed. by J. Nobel, Leipzig, 1937
- (19) 玄奘, 上掲書, 295頁
- (20) H. W. Bailey, *ibid.* p. 43
- (21) P. Pelliot, *Notes on Marco Polo*, vol. I Paris, 1959, p. 434
- (22) F. W. K. Müller, *Uigurica II* p. 70
- (23) B. Laufer, *Sino-Iranica*, Taipei. 1967, p. 574
- (24) 諸橋轍次「大漢和辞典」巻6, 835頁
- (25) 原田淑人「漢代絹の一名『鮮支』に就いて」東亜古文化研究, 座右宝刊行会, 1940, 435—447頁
- (26) 白鳥庫吉「西域史上の新研究」, 白鳥庫吉全集, 第6巻, 岩波書店, 1970
- (27) H. Schaefer, *Hellenistic textiles in northern Mongolia*, A. J. A., N. S. 47. 1943, p. 274
- (28) E. Diehl, In *Blättern für Münzfreunde*, Halle, 1923, Jhg. 58
- J. Werner, *Fund bosporonischer Münzen in der Dzungarei*, E. S. A. VIII, pp. 249—250
- 鈴木 治「絹路考」ユーラシア東西交渉史論攷, 国書刊行会, 1974, 276—277頁
- (29) Plinius, *Naturalis Historia*, vol. XI, 25—27. (cf. Plinius, *Natural history*, vol. 10 in The Loeb Classical Library)
- (30) 東晋, 法顯著, 長沢和俊訳注「法顯伝」東洋文庫194, 平凡社, 1971, 5—154頁
- (31) 玄奘, 上掲書, 295頁

(1980年10月15日稿)